

## 気質学の起源について

— エンペドクレスからラティーンへ —

伊藤 良子

気質学と関わりの深い四つの元素について、古代ギリシャのシロスのフェレキデスは水、風、火がクロノスから流出すると主張しました。また古代ギリシャの七賢人のひとりであるタレス（前624頃～547頃）は「総ては水から生まれた」と基本理念を語り、ヘラクレイトス（前550頃～480頃）は「総ては火から生じた」と語りました。

紀元前5世紀にギリシャで劇作家や抒情詩人、叙事詩人の全盛期が終わりを告げ、代わりに哲学者、歴史家、雄弁家、政治家が台頭しました。詩人にして指導的政治家、医師、教育者と多才を極めたエンペドクレス（前494～434）はその息子と親交があったピタゴラスの功績を公開しています。エンペドクレスによれば<sup>2)</sup>、現象世界は所謂四元素に支配された結果でした。彼は地水火風を神的・本質的な原諸力として捉えて、その中で愛と憎しみという形成力が働いているとしました。アリストテレスと同じように思考内容と知覚される内容とを一致したものと見ていました。エンペドクレスは地水火風と脾臓、脳、肝臓、胆嚢を対応関係にあるものとしてしました。

「人間への愛が存在するところには、芸術への愛も存在する」というこの有名なヒポクラテス（前460～375）の言葉には、古代ギリシャの精神がその深層で捉えた「人間性に在る美」が現されています。プラトンやアリストテレスもヒポクラテスの人物の偉大さを証言しています。彼の著名な著作集は3世紀始めにはアレクサンドリアの図書館にまでもたらされ、世界的な名声を生むこととなりました。古代ギリシャ人は哲学的に鍛錬された思考の形成と並んで、彫刻芸術が理想とするような完成された人間容姿の追求に対しても尊敬と愛情を持っていました。そしてまた「ヒポクラテスの宣誓」の名で親しまれる余りにも有名な次の文章は、今日なお、医学における良心的な在り方への最良の導き手となっています。

「そして私は患者の治癒の為に私の智と能力の限りを尽くして生命の有様の諸基本を適用し、逆に患者を駄目にしたり傷つけるようなことは決してしません。私はまた何人に対しても死に至らせるような薬を処方せず、こうした忠告を決して与えません。私はまたいかなる女性に対しても胎児の生命を殺すような手段を与えません。私は私の人生と医術をいつも純潔で潔白なものに保ちます」

このヒポクラテスこそは、エンペドクレスと並んで人間の四つの気質が意味する人間学的意味関係を治療的意味においても初めて認めた人でした。彼は様々な要素や現象を両極性によって捉えようとしてしました。それは例えば呼吸における呼気と吸気、そして胆嚢と粘液などです。呼吸には精神と心情を胆嚢と粘液には生命力と肉体を関連させました。その後、四つの気質を、そしてついには四つの原理をこれに適用しました：

「人間は体内に血液、粘液、黄色の、また黒色の胆汁を持っている。そしてこれらのものが体質を形作る。病気や健康もまたそれによる。健康が非常に良好なときはこの四つの気質の混合状態が均衡を保っている。それは質と量においてであり、可能な限り十分に混合されているということである。…そして身体の四つの原理は熱、寒、乾、湿である」

ここで四つの身体的基礎的力とは血液（ラテン語で sanguis）、粘液（phlegma）、黄胆汁（chole）、黒胆汁（merlantia chole）であり、身体の四つの原理とは熱（暖かく乾いたもの—火）、湿（暖かく湿ったもの—空気）、寒（冷たく湿ったもの—水）、乾（冷たく乾いたもの—土）です。

彼の述べるところからすれば、総ての病の本質は体液や気質の誤った混合です。彼の『総ての芸術に医学は先んずる』という観点は、彼の思考の核を成しているようです。

現代科学の立場からは、このような考えを理解することは困難でしょう。しかしヒポクラテスの時代の医学において、技術的な支えが今日に比べていかに単純で不完全であったかを考えるならば、診断や予後判定のために今日におけるものとは全く異なる可能性がありえたとはいえないという考えに至ることもできるでしょう。繊細で注意深い観察に加えて、しばしば天才的で直感的なひらめきが、患者を全体性において診断することを可能にしたと言われています。このことでまた、そんな全く違った体質をもった人間に対しては、同じ一つの病気にもかかわらず、異なった原因を見つけることもあるのです。

ヒポクラテスにとって、人間とは生命力の現れであり、肉体と心と不死の精神の相互関係によって成りたっていました。それゆえある治療のためには、これら総ての観点が考慮される必要があったのです。

小アジア、ペルガモンの出身の著名な医師であるガレ（130～199）はヒポクラテスを師と仰いでいました。彼は眼差しを外に向けると四つの要素が現れ、眼差しを内部に向けたときにそれは自己体験の中に現れるとして、地を「黒胆汁」、水を「粘液」、空気を「靈魂」、火を「血液」と対応させました。更にダンテの教師であり、友人でもあったブルネット・ラティーニ（1222～1294）は『宝石箱』という彼の詩の中の、気質と元素に関する部分を取り扱った次の文章の中で、古代から続く観点と完全に一致したものを描き出しています<sup>11</sup>：

違った色を持っている  
4つの種類の液がある。  
個々の出来にしたがって  
あらゆる物を凝縮させ  
しばしば変化を創り出す、  
ひとつの液が、前に出て  
別の液を従える。  
冷たく乾いた醜い液は  
憂鬱質に満ちている、  
温かく湿った別の液は  
血液の力のもとにあって、  
爽やかさと喜びに満ちている；  
粘液質は上へと昇り、  
湿って冷たい、  
こうした人は鈍重で  
くよくよしたがる癖がある。

さてやってきた胆汁質は、  
 とても熱くて乾いている  
 容易に人を勇気付け、  
 そして時には狂暴にする。  
 これら四つ  
 正反対のものたちを  
 心を持った存在の中で  
 調和を生み出し、  
 調整を行い、  
 抑制を保ち  
 それぞれを形にしよう、  
 生み出されてくる形態が  
 それらに貫かれるように。  
 他の方法を採るのでは  
 何も生めないことを知れ。  
 更に世界は  
 上から下まで  
 四大元素の  
 秩序と法則で形成される：  
 空気と、水と、火と、土と、  
 すべてに相応しい位置付けを。  
 なぜなら総てをうまくするため、  
 冷たいものを暖かいもので、  
 乾いたものを湿ったもので、  
 総て一緒に  
 個々其々に  
 同じでないものが同じとなるよう、  
 抑えを利かせる、  
 何故なら総てが他に対し、  
 異なる敵にあい向かう。  
 人は誰でも独自性と  
 異なる形姿を持ちながら、  
 時に両者がかみ合わぬ、  
 しかしこの私が  
 そこに調和をもたらして、  
 別れたものが  
 ひとつに戻る。  
 私は世界を

保ち、支える  
神の意思に従って：

紀元前7世紀に始まった気質学の教えは、13世紀にはこのような詩の形式に現されていましたが、そして20世紀の現代においては教育家ルドルフ・シュタイナーが、それら気質に関する先人の考えをさらに発展させ紹介しています。彼は人間という存在が地水火風という四つの地上的な要素と強い関わりを持っているだけでなく、一古代ギリシャでは自明の観点であった一全宇宙とも強いつながりの中にあると説明しています。また、とりわけ気質に従った教育上の配慮について、多くの興味深い示唆を残しています。

#### 参考文献

- 1) Detlaf Sixel : Rudolf Steiner über die Temperamente, Verlag am Goetheanum, 27 ~ 29 頁 (1990) (Ursprungsimpulse der Elementen-und Temperamentenlehre bei den griechischen Philosophen Pherekydes von Syros, Thales von Milet und Heraklit)
- 2) Detlaf Sixel : Rudolf Steiner über die Temperamente, Verlag am Goetheanum, 30 ~ 33 頁 (1990) (Kosmische Zusammenhänge der Elemente und Temperamente in der Lehre des Empedokles)
- 3) Detlaf Sixel : Rudolf Steiner über die Temperamente, Verlag am Goetheanum, 34 ~ 38 頁 (1990) (Ursprungsimpulse der Temperamentenlehre bei Hippokrates)
- 4) Detlaf Sixel : Rudolf Steiner über die Temperamente, Verlag am Goetheanum, 39 ~ 44 頁 (1990) (Einfluß der Säftelehre im Wirkungsbereich der Temperamente bei Galen)
- 5) Detlaf Sixel : Rudolf Steiner über die Temperamente, Verlag am Goetheanum, 45 ~ 48 頁 (1990) (Erneuerung einer spirituellen Anschauungsweise über die Elemente und Temperamente bei Brunetto Latini)
- 6) 伊藤良子, 山田豊子 : 人間の気質と TEG との関連性, 京都市立看護短期大学紀要, 26 : 57 ~ 65 (2001)